

児童が主体的に取り組み、表現の力を高める音楽科学習指導の在り方

～ 意欲を高める教材の工夫と、児童が学習活動をマネジメントする取組の工夫を通して ～

目 次

I 研究の概要

1 研究主題	2	1
2 主題設定の理由	2	1
3 研究目的	2	1
4 研究仮説	2	1
5 研究の全体構想	2	2
6 研究経過	2	2

II 研究の実際

1 研究の基本的な考え方（ゴールイメージ）	2	3
（1）児童の変容から見た研究の全体像	2	3
（2）本研究における「表現の力」について	2	3
（3）児童の「主体的な取組」について	2	4
（4）「学習マネジメント」について	2	5
2 児童の関心・意欲を高める教材の開発	2	6
（1）児童になじみのある曲の教材化	2	6
（2）児童の技能に対応できるパートの作成	2	7
（3）教材化の具体的方法	2	7
（4）題材の「ねらい」と「共通事項」の位置付け	2	11
（5）仮説1における授業での検証とその考察	2	12
3 児童が学習活動をマネジメントする取組の工夫	2	14
（1）個人差に対応できる練習方法の工夫	2	14
（2）児童が主体的に活動できる場の工夫	2	15
（3）児童が主体的に活動できる教具の開発	2	15
（4）学習マネジメントカードの作成	2	16
（5）仮説2における授業での検証とその考察	2	17

III 研究の成果と今後の課題

1 成果	2	20
2 課題	2	20

〈引用文献・参考文献〉	2	20
-------------	---	----

研究実践学校 三股町立三股西小学校
研 究 員 小 野 田 武 晃

I 研究の概要

1 研究主題

児童が主体的に取り組み、表現の力を高める音楽科学習指導の在り方
～ 意欲を高める教材の工夫と、児童が学習活動をマネジメントする取組の工夫を通して ～

2 主題設定の理由

今日、児童を取り巻く社会や家庭環境の急激な変化という状況を踏まえ、自ら考え行動できる能力や豊かな人間性などの「生きる力」を育成することを目指し、教育改革が進められてきた。このような中、学習指導要領が改訂され、音楽科の目標として「表現及び鑑賞の活動を通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う。」とされた。この中の「豊かな情操を養う」ことは、教育基本法第二条「教育の目標」の部分に新たに付け加えられ、我が国の教育全体において、「豊かな情操」を培っていくことの大切さを示している。また、学習指導要領解説の「音楽科改訂の要点」として、常に児童の情意面と能力面とを関わらせながら指導に当たることの重要性が述べられており、これまでの指導内容や指導方法を改善し、児童が音楽の学習に対する関心や意欲を高めるとともに、思いや意図をもって主体的に音楽活動ができるようにすることが求められている。

本校では、毎月設定している「月の歌」を各クラスで歌ったり、さまざまな行事の中で音楽の表現を行うなど、音楽に親しみ楽しむ活動を行っている。「群読・音楽集会」では、発表する方も聴く方も迫力ある演奏に感動する姿が見られ、有意義な集会となっている。しかし、発表までの練習や、普段の音楽の学習の様子を振り返ってみると、教師の指示通りに歌ったり演奏したりするだけの、表面的な学習に終始しているのではないかと考えた。また、教師主導の表現になるため、楽曲のよさや特徴などを、児童が自ら考えて表現したり、感じ取ったりすることが不十分ではないかと私自身反省をしているところである。

一人一人の学習の様子に目を向けてみると、音楽の学習に苦手意識を持つ児童は、取組が受動的でなかなか意欲的に活動できない様子が見られる。また、音楽が得意な児童は、「もっと難しいものがほしい。」と、授業での音楽活動に物足りなさを感じている様子も感じられる。

そこで本研究では、どの児童も主体的に音楽活動に取り組めるように、まずは、「やってみたい。」「自分も練習すればできそうだ。」というような、意欲や見通しの持てる教材の在り方を研究していくことが必要ではないかと考えた。また、技能の個人差にも対応できるように教材を工夫すれば、どの児童も自分なりに努力ができ、みんなと合奏する喜びを感じたり、達成感を味わったりすることができるのではないかと考えた。

また、技能の個人差に対応できる練習方法や教具を整備して、どの児童も練習の方法が分かり、自分のペースで表現の力を高められるような器楽活動を展開すること、さらに、児童自身が練習の進捗状況をふまえ、さまざまな練習方法や教具を総合的に活用しながら、活動を自分でマネジメントできるような工夫を行えば、教師主導の活動から、自分自身で見通しを持ち判断していくという、主体的な活動ができるようになるのではないかと考えた。

このように、児童が主体的に音楽活動に取り組み、表現の力を高める音楽科学習指導の在り方を研究することは、自ら考え行動する力や音楽に対する感性の育成、さらには、豊かな情操や生涯にわたり音楽を愛好する態度を育成する上で大変有意義であると考え、本主題を設定した。

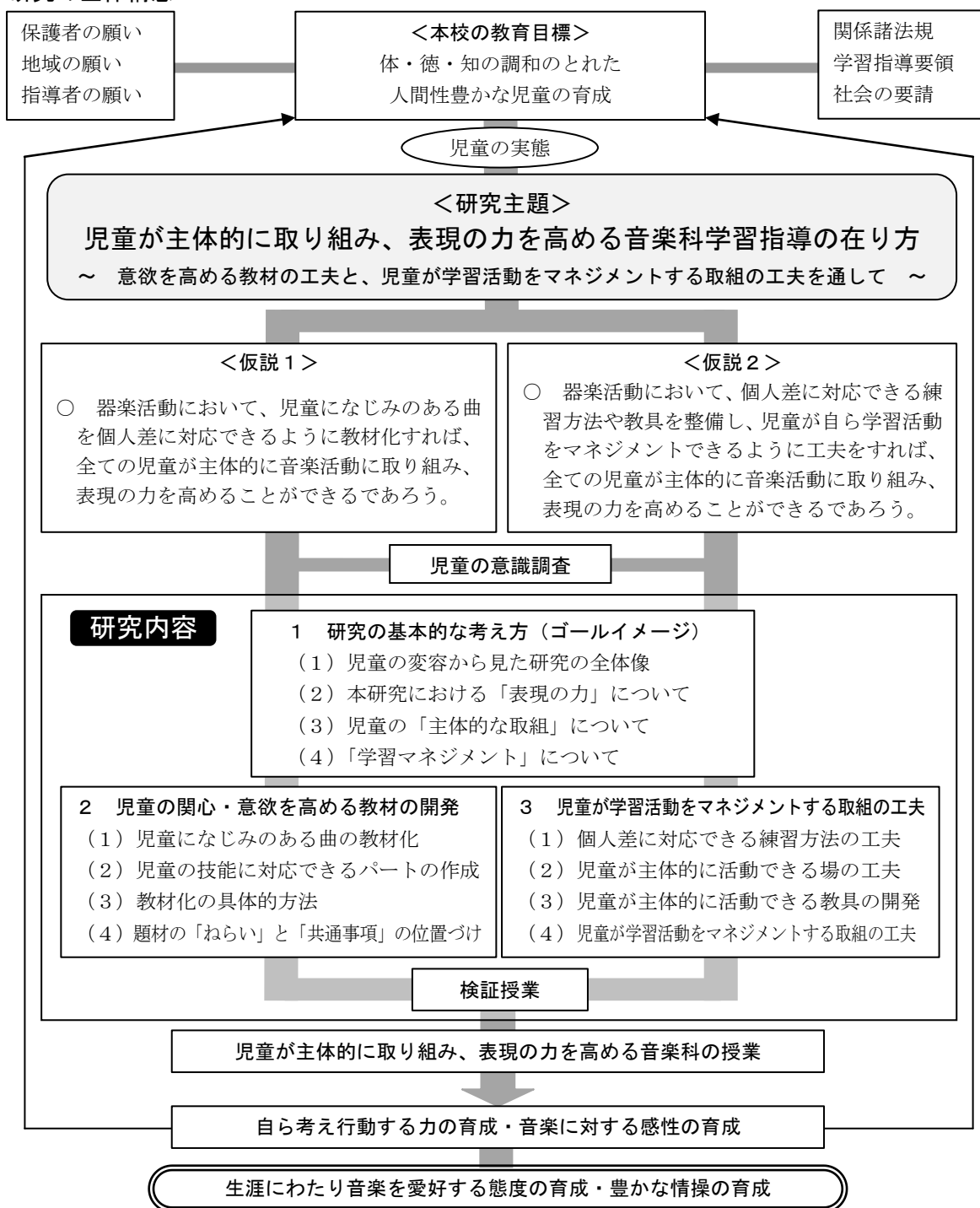
3 研究目的

児童が主体的に音楽活動に取り組み、表現の力を高めていけるようにするために、器楽活動における教材の工夫の在り方や、活動の在り方を究明する。

4 研究仮説

- 器楽活動において、児童になじみのある曲を個人差に対応できるように教材化すれば、児童は主体的に音楽活動に取り組み、表現の力を高めることができるであろう。
- 器楽活動において、個人差に対応できる練習方法や教具を整備し、児童が自ら学習活動をマネジメントできるように工夫をすれば、主体的に音楽活動に取り組み、表現の力を高めることができるであろう。

5 研究の全体構想



6 研究経過

月	研究内容
4	研究主題・副題の設定、研究計画の立案
5	理論研究、文献研究、意識調査計画・作成
6	理論研究、意識調査実施（三股西小）・分析、検証授業の指導案作成・教材作成
7	検証授業Ⅰ・Ⅱ（三股西小）、事後意識調査（三股西小）・事後研究
8	検証授業の分析・考察、理論の再構築
9	意識調査分析、検証授業の指導案作成、検証授業Ⅲ・Ⅳ（三股西小）
10	事後意識調査（三股西小）・事後研究、検証授業の分析
11	検証授業の分析・考察、理論研究・研究報告書の作成
12～2	研究のまとめ、研究報告書の作成、発表原稿作成
3	研究発表準備、研究発表

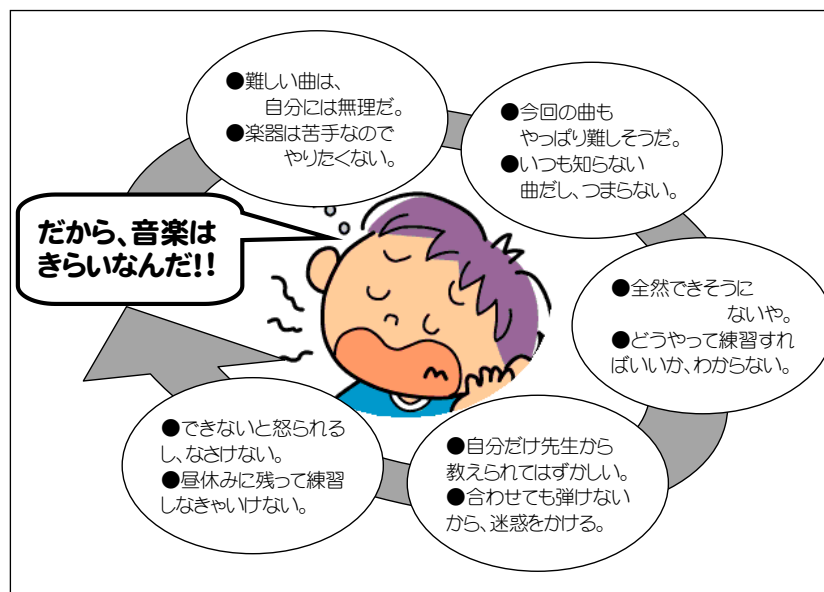
(3) 児童の「主体的な取組」について

ア 「主体的」に活動するための視点

児童が主体的に活動するためには、児童それぞれが、「自己実現への見通し」が持てる」ことが大切であると考えた。「自己実現への見通し」を持たせるために、右上の視点をふまえ研究を進めた。

特に、楽器演奏を苦手とする児童は、【図2】のようにメンタルブロック（思いこみによる否定意識の壁）が循環的に働いていると推測される。そこで、学習の導入時の段階から、「自己実現への見通し」が持てるように、各段階でさまざまな支援を行っていく必要があると考えた。

- ◆「自己実現へ見通し」の視点◆**
- ① 自分なりに努力すれば目標が実現できる（できそうだ）。
 - ② 課題の設定や取組が自己決定できる（できそうだ）。
 - ③ 自分の存在を認めてもらえる（もらえそうだ）。



【図2】 器楽活動における、メンタルブロックサイクル

イ 活動意欲の高まる教材について

事前アンケートにおいて、合奏してみたい曲として、よく知っている歌謡曲やCMソングを選択する傾向が見られた。従って、このような曲を教材化し、児童の「学びたい」という欲求を喚起することが、「主体的に取り組む」ことにつながると考えた。

そこで、音楽科学習指導の単元（題材）において、導入段階あるいは発展的な学習の教材として、教科書教材と併せて活用できる教材曲を開発していくことにした。児童の意欲を高め、主体的に活動できると考えられる教材曲として、次の視点をふまえて開発に当たった。

- ◆ 活動意欲の高まる教材曲の視点 ◆**
- ① 児童になじみのある曲（流行の歌謡曲、映画やテレビ番組の挿入曲など）
 - ② 技能的に比較的簡単なメロディの曲
 - ③ 演奏に発展性があり、児童の思いや意図を表現できる曲

さらに、全ての児童が「自己実現への見通し」を持てるように、さまざまな技能レベルの合奏パートを用意するようにする。特に楽器演奏に苦手意識を持っている児童には、「楽器は苦手なので、つまらない。」というようなメンタルブロックが存在すると思われる。それを排除するために、楽器演奏が苦手な児童が楽しんで演奏できるパートを用意する。

ウ 個人差に対応することで生まれる「主体性」

児童それぞれが主体的に活動するためには、個人差に対応できる「練習方法」や「教具」が必要になってくる。山本弘 氏¹⁾は著書の中で、「ひとりひとり」に対応することが活動の主体性につながると述べ、「個人差に対応する条件」として、右の5つを挙げており、この考えを基に、どの児童もマイペースで活動できる練習方法や教具の研究を行った。

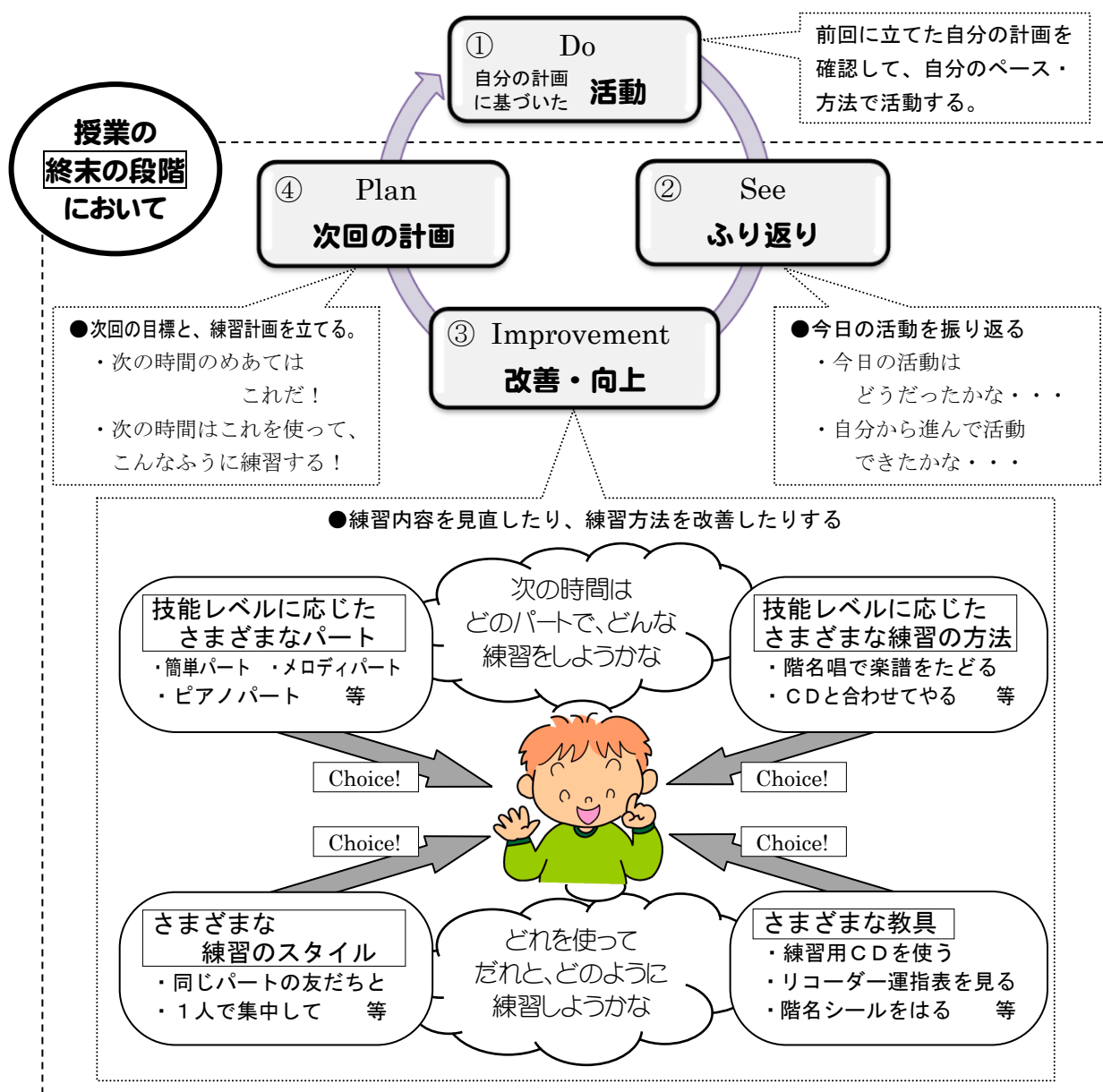
- ◆ 個人差に対応する条件 ◆**
- 練習が個によって・・・
- ① 量を加減できる。
 - ② 質を加減できる。
 - ③ 速度を加減できる。
 - ④ 進度を加減できる。
 - ⑤ フィードバックできる。

(4)「学習マネジメント」について

児童それぞれが自己実現できるようにするためには、自分自身で課題を設定したり、練習方法を選択したり、さまざまな教具を活用したりする営みが必要になる。本研究では、自分で練習方法を改善しながら目標を実現しようとする営みを「学習マネジメント」と考え、研究を進めていくことにした。

児童自身が学習活動をマネジメントしていけるように、1時間の授業の中での基本的な学習過程を次の【図3】のように考えた。

【図3】 学習マネジメントを取り入れた基本的な学習過程



前回に立てた自分の計画に基づいて活動を行った後、図のように、授業の終末の段階において、振り返り(See)、改善・向上(Improvement)、次回の計画(Plan)を自分なりに考えるというサイクルを考えた。

特に改善・向上(Improvement)の段階においては、本時の反省を基にしながら、次時の活動について、さまざまなパート・練習の方法・練習のスタイル・教具等を選択し、自分で考えながら改善していけるように支援することにした。

2 児童の関心・意欲を高める教材の開発

(1) 児童になじみのある曲の教材化

ア テレビ番組挿入曲「TAKUMI」

人気テレビ番組の挿入曲「TAKUMI」（作曲：松谷卓）を、合奏曲に編曲した。この曲は、児童もよく知っている曲であり、同じフレーズも多いため習熟しやすく、達成感を味わいやすいと考えた。また、メロディのほかに合奏パートを編曲すれば、題材「音のひびきあい」のねらいにも迫ることができ、「楽曲のテクスチュア（音の重なりや組み合わせ方）」を理解しやすい教材になると考えた。

この曲の原調は「ホ長調」であり、＃が4つになるため、このまま演奏するのは難しい。そこで、【楽譜1】のように全体の音程を4半音下げて「ハ長調」に移調し、演奏しやすくした。

The image shows two staves of music. The top staff is labeled '原調：ホ長調' (Original key: D major) and the bottom staff is labeled 'ハ長調に移調' (Transposed to C major). Both staves are in 4/4 time. The melody consists of eighth and quarter notes, with some triplet markings. A bracket on the left side of the staves indicates the transposition from the original key to the new key.

【楽譜1】原曲の「ホ長調」を「ハ長調」に移調した例

イ コマーシャルソング

音楽の学習でやってみたい曲として、事前アンケートを行った結果、テレビコマーシャルの曲の人气が高かった。コマーシャルで流れる曲は、おおむねどれも短く印象的で、児童にもなじみが深い。それを音楽の学習として演奏するという意外性もあり、意欲を喚起する上で効果的であると考えた。また、短い曲が多いため【表1】のように複数の曲を教材化し、児童が興味・関心や自分の技能レベルによって選択できるようにした。

【表1】 コマーシャルソングの教材曲について

曲 名	原 調	移調後の調	拍子
きのこの唄（ホクト）	ニ長調（D）	ト長調（G）	4／4
カルビーポテトチップス（カルビー）	変ロ長調（B♭）	ハ長調（C）	4／4
アヒルのワルツ（アフラック）	ハ長調（C）	ヘ長調（F）	3／4
イオン火曜市（イオングループ）	ハ長調（C）	ハ長調（C）	4／4
それぞれの夢（レオパレス21）	変ロ長調（B♭）	ハ長調（C）	4／4

いずれの曲についても、児童が演奏しやすいように、＃や♭が1つまでになるようにし、鍵盤やリコーダーで演奏できる音域を考慮して、「ハ長調」「ト長調」「ヘ長調」に移調した。どの調に移調するのがよいのか、具体的な教材化（編曲）の方法については「(3) 教材化の具体的方法」で述べる。

(2) 児童の技能に対応できるパートの作成

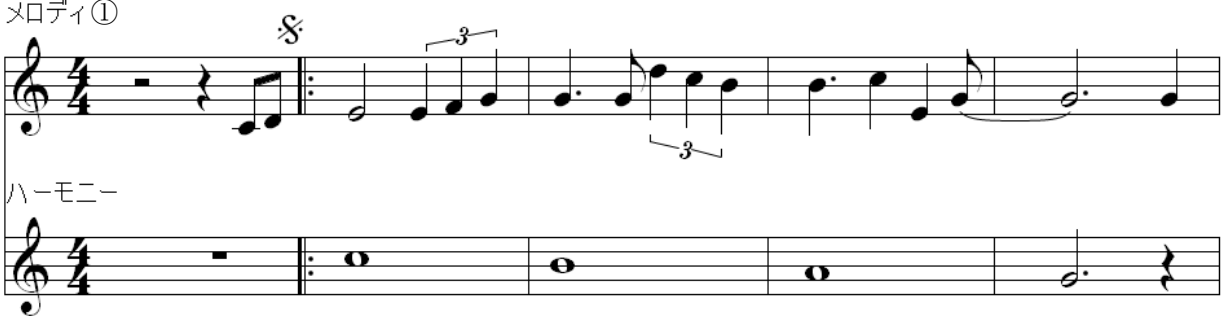
合奏のパートについては、旋律を演奏する「メロディパート」のほかに、児童が技能レベルで選択できるように、さまざまなパートを編曲・作成した。例えば、(1) アのテレビ番組挿入曲「TAKUMI」については、次の【表2】のようなパートを準備した。

【表2】 「TAKUMI」の合奏パートについて

パート	パートの概要	難易度
ハーモニー	曲の和音の一部の音を使ってアレンジしたもの。楽譜もリズムもとても簡単であり、楽器演奏の苦手な児童も楽しめる。	易 ↓ 難
メロディ①	旋律の主な部分と、ハーモニーパートを合わせたもの。簡単ながら、旋律を演奏する楽しさも味わうことができる。	
メロディ②	旋律そのままのパート。特に、リコーダーでは音域的に演奏がむずかしいが、成就感や達成感が味わえる。	
ピアノ	両手を使った伴奏。技能的に高いレベルが必要であり、成就感や達成感が味わえ、周囲からも高い評価を得られる。	

次の【楽譜2】のように、「ハーモニーパート」はリズムも簡単で、リコーダーでも鍵盤でも演奏しやすいように編曲し、技能が未熟な児童でも「できた」という達成感を味わえるようにした。児童のメンタルブロックを排除するために、まずはこの「ハーモニーパート」のはじめの部分を全員で一緒に演奏して、器楽活動に対する抵抗感をなくしていくようにした。

メロディ①



ハーモニー

The image shows two staves of music. The top staff, labeled 'メロディ①', is in 4/4 time and features a melody with eighth and quarter notes, including triplets. The bottom staff, labeled 'ハーモニー', is also in 4/4 time and consists of a simple harmonic accompaniment using whole and half notes.

【楽譜2】「TAKUMI」の楽譜（メロディ①パートと、ハーモニーパートの例【初めの部分】）

(3) 教材化の具体的方法

ア 移調

身近にある曲を教材化する際には市販の楽譜集等を活用するが、実際の楽譜が＃（シャープ）や♭（フラット）の多い調になっていて、演奏するのが難しいものになっていたり、リコーダーで演奏しにくい、または演奏できない音域になっていたりすることが少なくない。そこで、曲の元の楽譜を、児童が演奏しやすく満足感を得られるようなものにするための具体的な教材化（編曲）の方法をまとめることにした。

まずは、＃（シャープ）や♭（フラット）のない、または少ない楽譜になるように、調を変える方法をマニュアル化【資料1】した。また、移調の実践例を【資料2】に挙げる。

♪ 身近な曲の教材化マニュアル①♪ ～移調編～

①原調を確認する

- ★ 市販の楽譜集等で、曲の調を確認する。
- ★ どの調かわからない場合は、移調早見表を見る。

②ねらいに合う
調を考える

- ★ 演奏が容易になるよう、基本的には＃や♭の少ない調にする。
- ★ ねらいに合う調を考える。

Point!

とにかく＃や♭のない楽譜にする → ハ長調に
 ♯の運指等を習得させたい場合 → ト長調に
 ♭の運指等を習得させたい場合 → ヘ長調に

③楽器の音域に
合う調を考える

- ★ 移調をした時の、メロディの最高音と最低音を確認する。
- ★ それぞれの楽器で、演奏可能な範囲の音域を確認する。
- ★ 音域が合わない場合は、調を変えてみる。

Point!

リコーダーで演奏する場合は、運指の難易度を考慮して音域・調を考える。

<ソプラノリコーダーの場合>

高いソ～	避けた方がよい
高いミ～ファ、ファ＃	やや難しい
ソ～高いレ、ド＃	とても易しい
ミ～ファ、シ♭	易しい
ド～レ	やや吹きにくい

<アルトリコーダーの場合>

高いド～	避けた方がよい
ラ～シ、低いシ♭	やや難しい
ド～ソ、ファ＃	とても易しい
低いラ～シ、ミ♭	易しい
低いファ～ソ	やや吹きにくい

Point!

鍵盤ハーモニカの場合は、「ド」～高い「ミ」程度がのぞましい。

④ 移調する

- ★ 移調早見表で、原調から音をいくつずらせばよいか確認する。
- ★ メロディの音を全てずらしていく。
- ★ 改めて、演奏可能か（運指・音域）確認する。

移調早見表			ハ長調・イ短調にするには	ト長調・ホ短調にするには	ヘ長調・ニ短調にするには
＃ の数	♭ の数	※ 曲の感じが、 明るい感じならば「長調」 くらい感じならば「短調」			
0	0	ハ長調・イ短調		5半音下げる	5半音上げる
1		ト長調・ホ短調	5半音上げる		2半音下げる
2		二長調・ロ短調	2半音下げる	5半音上げる	3半音上げる
3		イ長調・嬰ヘ短調	3半音上げる	2半音下げる	4半音下げる
4		ホ長調・嬰ハ短調	4半音下げる	3半音上げる	半音上げる
5		ロ長調・嬰ト短調	半音上げる	4半音下げる	6半音上げる（下げる）
6		嬰ヘ長調・嬰ニ短調	6半音上げる（下げる）	半音上げる	半音下げる
7		嬰ハ長調・嬰イ短調	半音下げる	6半音上げる（下げる）	4半音上げる
	1	ヘ長調・ニ短調	5半音下げる	2半音上げる	
	2	変ロ長調・ト短調	2半音上げる	3半音下げる	5半音下げる
	3	変ホ長調・ハ短調	3半音下げる	4半音上げる	2半音上げる
	4	変イ長調・ヘ短調	4半音上げる	半音下げる	3半音下げる
	5	変ニ長調・変ロ短調	半音下げる	6半音上げる（下げる）	4半音上げる
	6	変ト長調・変ホ短調	6半音上げる（下げる）	半音上げる	半音下げる
	7	変ハ長調・変イ短調	半音上げる	4半音下げる	6半音上げる（下げる）

＜移調の実践例＞

例 「きのこの唄」を、リコーダーで演奏したい。（できるだけ＃や♭の少ない楽譜に）

原調は「ニ長調」

ファ＃の運指が難しい

低い「シ」「ウ」は、演奏不可

「ハ長調」に移調すると

＃がつく音はなくなった

しかし、低い音は演奏不可

(1オクターブ上げたとしても)

演奏可能になったが、高い「ミ」「ファ」の音が難しい

「ト長調」に移調すると

ファの音は＃になるが、メロディに＃は出てこない

リコーダーで演奏しやすい音域になった

→「ト長調」ならよさそう

イ パート譜の作成

身近な曲を教材化するに当たり、市販の楽譜集等を活用していくが、合奏用に編曲されているものは少なく、「メロディパート」以外の合奏パートについては、自作する必要がある。

ここでは、合奏において重要な「ベースパート」（低音パート）と、楽器演奏の苦手な児童も楽しめる「ハーモニーパート」の具体的な作成方法についてマニュアル化【資料3】した。

♪ 身近な曲の教材化マニュアル②♪ ～パート譜作成編～

①コードを確認する

- ★ 市販の楽譜集等で、曲のコード（和音）を確認する。
- ★ 移調した場合は、メロディ同様、コード（和音）も合わせて変更する。

②ベースパートをつくる

- ★ コードの根音（もともになる音）を基本として、楽譜にしていく。

コード	C	D	E	F	G	A	B
根音	ド	レ	ミ	ファ	ソ	ラ	シ

（例：アヒルのワルツ）

※ 曲の感じに合わせて、リズムを工夫するとよい

The example shows a melody line in 3/4 time with a key signature of one flat (B-flat). The melody consists of eighth and quarter notes. Below the melody, the bass line is shown with a 3/4 time signature and a key signature of one flat. The bass line uses a simple pattern of quarter and eighth notes. Chords are indicated above the melody: B-flat (B-flat), A minor (A), C (C), and F (F). The lyrics 'アヒルのワルツ' are written under the melody.

③ハーモニーパートをつくる

- ★ コードの和音の中から、音を選択する。
- ★ 全音符や2分音符等、長い音でリズムを構成する。

Point! <よい音を選択するポイント>

- ★ それぞれの楽器で、演奏可能な範囲の音域を確認する。
- ★ 1フレーズの中で、なだらかに移行するように音を選択する。
- ★ メロディや、ベース音と同じ音でもよいが、基本的には重ならないようにする。

（例：TAKUMI）

The example shows a melody line in 4/4 time with a key signature of one flat (B-flat). The melody consists of quarter and eighth notes. Below the melody, the chords are indicated: C (C), E minor (E), A minor (A), and G (G). The 'Selected Notes' (選択した音) are shown in a separate line, with notes chosen from the chords. The notes are: C (C), E (E), A (A), and G (G). The notes are written as whole notes. Two callouts provide guidance: 'リコーダーで、演奏しやすい音域の音を選択。' (Select notes in a range easy to play on a recorder.) and 'ベースと同じ音だが、なだらかに音が移行する音を選択。' (Select notes that transition smoothly from the same note as the bass.)

(4) 題材の「ねらい」と「共通事項」の位置付け

児童になじみのある曲を使った学習を取り入れることは、音楽の学習に対して物足りなさを感じている児童の学習意欲を喚起するとともに、楽器演奏を苦手とする児童のメンタルブロックを排除する効果が期待できる。しかしながら、児童が「楽しそうだ。やってみたい。」「これならできそうだ。」などと感じることができたとしても、その曲を通して、題材の目標やねらいの達成に迫ることができなければ、教材として適当と言えない。

そこで、編曲した教材曲に対して、何の題材で、どのような目標（ねらい）を達成するためにその曲を使うのか、また、教材曲を通して指導する「共通事項」をしっかりと位置付けて指導に当たることが肝要であると考えた。

「共通事項」とは、学習指導要領において、どの活動においても共通して指導すべき内容として、旋律・リズム・速度・音の重なり・音階や調などの「音楽を特徴付けている要素」や、旋律・フレーズにおける、反復・問いと答えの関係といった「音楽の仕組み」についての指導事項のことである。

例えば、(1) イの商業ソングの教材では、次の【資料4】のように、楽曲のどの部分でどのような内容を指導することができるのかを明確にした。また、これらを一方的に指導するのではなく、児童が演奏したり聴いたりして感想を話し合う活動の中で、教材曲の特徴や音楽の面白さ・美しさを感じ取ることができるようにした。さらに、【資料5】のように、題材・目標、ねらいとする「共通事項」を位置付けた。

【資料4】商業ソングの教材曲『アヒルのワルツ』 教材研究の例

The image shows a musical score for 'Ahi no Waltz' (アヒルのワルツ) in 3/4 time, 4/3 feel, with a tempo of 120. The score is divided into two systems, A and B. Annotations highlight various musical features and teaching points:

- 速度記号** (Tempo marking): 120
- シ♭のリコーダー運指** (Fingering for B-flat recorder)
- シ♭の鍵盤の場所** (Location of B-flat on the keyboard)
- メロディ** (Melody)
- ベース** (Bass)
- 弱起で始まる** (Starts with a weak start)
- 付点2分音符** (Dotted half note)
- ヘ長調** (D major)
- 4分の3拍子** (3/4 time)
- ◎3拍子の曲の感じ (曲の特徴)** (Feel of 3/4 time (曲の特徴))
- スタッカート記号** (Staccato marking)
- ◎スタッカートを生かした演奏 (曲の面白さ)** (Playing staccato to enhance the fun of the song (曲の面白さ))
- ◎メロディの問いと答え (曲の特徴)** (Question and answer in the melody (曲の特徴))
- ◎前半と後半との曲の感じの対比 (曲の面白さ)** (Contrast in the feel of the first and second halves (曲の面白さ))
- ◎メロディの反復 (曲の特徴)** (Repetition of the melody (曲の特徴))

【資料5】教材「コマーシャルソングを楽しもう」における、目標と共通事項の位置づけ

■ 題 材 「曲の特徴を生かして」

■ 教材名 「コマーシャルソングを楽しもう」

■ 目 標

- 器楽活動を通して音楽のよさや面白さを感じ、友だちと楽しく演奏して楽しむことができる。
(音楽への関心・意欲・態度)
- 合奏曲の旋律やリズム等の面白さに気づくとともに、曲の特徴を演奏に生かそうとすることができる。
(音楽的な感受や表現の工夫)
- 自分に合った練習方法や楽器・パートで、合奏することができる。
(表現の技能)
- 拍子記号や音楽記号の意味を知り、曲の中で理解することができる。
(知識・理解)

■ 「共通事項」との関わり

- リズム………スタッカートや、付点8分音符＋16分音符のリズムなどにふれさせ、リズムを感じとる。
- 速度………速度記号と、それぞれの曲の速さについて理解する。
- 拍子………4分の3拍子と4分の4拍子の違いについて理解する。弱起で始まる曲の特徴を感じ取る。
- フレーズ………メロディの「問いと答え」、「反復」の特徴について押さえる。
- 和声の響き……全体を通して、メロディとベースの音の重なりを感じ取る。
- 音楽記号………拍子記号、速度記号、♭、♯、付点2分音符等について理解する。

(5) 仮説1における授業での検証とその考察

ア 児童になじみのある曲の教材化

この研究を実践するに当たり、研究実践校の6年生に事前アンケート（意識調査）を行った。

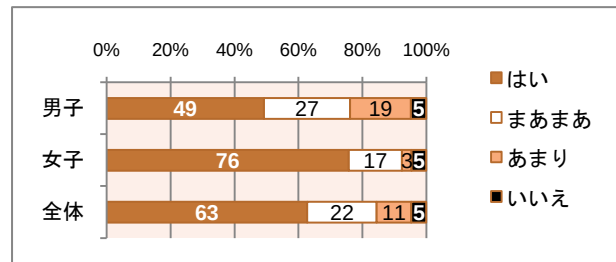
「楽器を演奏する活動は楽しいですか。」という問いに、全体で63%の児童が「はい」と答えているが、「あまり」「いいえ」と答えた児童が全体で16%おり、特に男子は24%と、4人に1人は苦手意識を持っていた。

教材曲「TAKUMI」での活動後のアンケートでは、全体の88%の児童が「はい」と答えた。また、「CMソング」での活動後では、全体の91%の児童が「はい」と答えた。このことから、今回、これらの曲を教材化して活動したことが、児童の活動意欲を高めた一因となったことが考えられる。

児童になじみのある曲の教材化に際しては、「身近な曲の教材化マニュアル」を活用したことで、児童にとって演奏しやすい楽譜・パートとして効率的に作成することが出来た。

事前アンケート

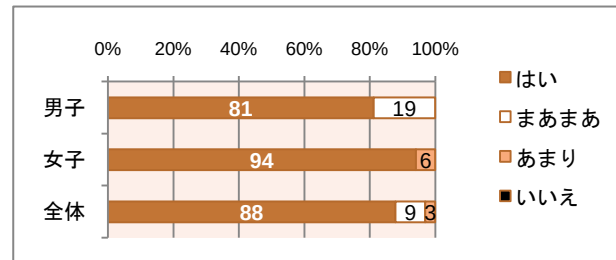
・楽器を演奏する活動は楽しいと思いますか。



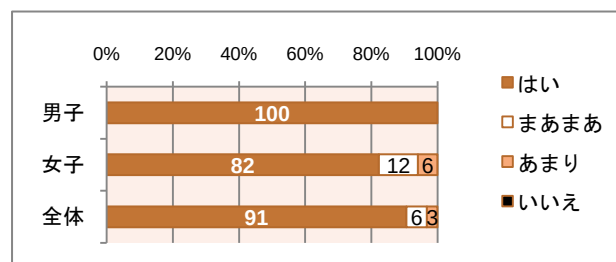
事後アンケート

・楽器を演奏する活動は楽しいと思いますか。

(教材曲「TAKUMI」での活動後)



(教材曲「CMソング」での活動後)



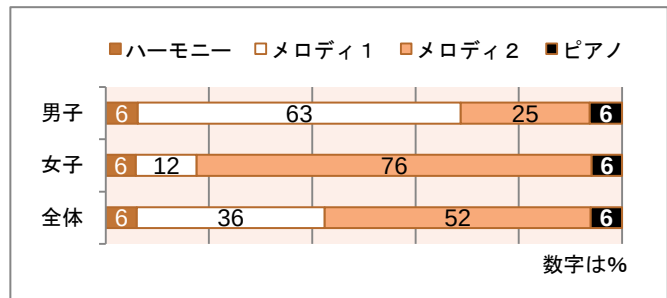
イ 個人の技能レベルに対応できるパートの作成

教材曲「TAKUMI」で、「あなたが、一番練習したパートは何ですか。」という問いに対して、男子は63%の児童が「メロディ1」を、女子は76%の児童が「メロディ2」を選んでいった。

はじめに、一番易しい「ハーモニーパート」を練習して、さらに技能レベルの高い「メロディ」パートに挑戦しようという意識に移っていったことがわかる。

事後アンケート

・あなたが一番練習したパートは何ですか。



・（あなたが一番練習したパートは何ですか。）それは、なぜですか。

男 子	女 子
・メロディがひけたら、かっこいいから。 ・メロディが演奏できるようになりたかったから。 ・覚えたら楽しいパートだから。 ・ちょうどよい難しさだったから。	・メロディがあると、どんな曲か分かるから。 ・メロディをひけば、家族の人に聞かせられるから。 ・メロディの方が、聴いてすぐ分かるから。 ・ハーモニーパートは簡単すぎだから。 ・メロディパートを完璧にしたかったから。

そのパートを選んだ理由を聞いてみると、テレビ等でなじみのある曲では、やはりそのメロディが印象的であり、その一部でもよいので演奏できるようになりたいと感じていることが分かった。「メロディがひけたらかっこいい。」「メロディをひけば、家族の人に聴かせられる。」など、演奏を聴かせる第三者を意識する児童も見られ、認めてもらいたいという気持ちが高まり、主体的な活動につながったと考えられる。

楽器演奏に苦手意識を持っている児童も、ただ、簡単であればよいのではなく、少しでもその曲の「メロディ」が演奏できるようになりたいと思っていることが分かった。メンタルブロックが薄れ、主体的に活動しようとする意識が高まったと捉えることが出来る。



【写真1】メロディの運指を意欲的に調べる児童



【写真2】木琴でメロディパートに挑戦している児童



【写真3】ピアノパートに挑戦している児童

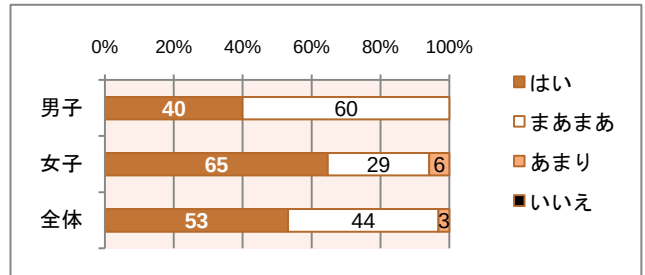
ウ 「ねらい」と「共通事項」を位置づけたことについて

事後アンケートにおいて、「練習した曲の『拍子』や『楽譜の記号の意味』がわかりましたか。」という問いに対して、全体の53%の児童が「はい」と答え、「まあまあ」と合わせると97%に上った。また、「楽器を演奏する力が伸びたと思いますか。」という問いに対しては、全体の94%が「はい」と答える結果となった。

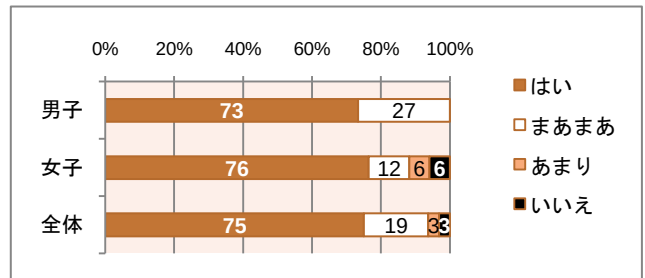
作成（編曲）した教材曲について、「目標」や「共通事項」とのかかわりをしっかりと位置づけて指導したことで、ただ単に「楽しかった。」というだけでなく、音楽の学習として身に付けるべき知識や、楽器を演奏する力が身に付いたという実感を持ちながら、活動することができたと考えられる。

事後アンケート

・練習した曲の「ひょうし」や「楽ふの記号の意味」がわかりましたか。



・今回の学習で、楽器を演奏する力が伸びたと思いますか。



3 児童が学習活動をマネジメントする取組の工夫

（1）個人差に対応できる練習方法の工夫

どの児童も、練習をどのように進めていけばよいか分かるように、練習の手引き『えんそうマスター虎の巻』【資料6】を作成し、活用できるようにした。

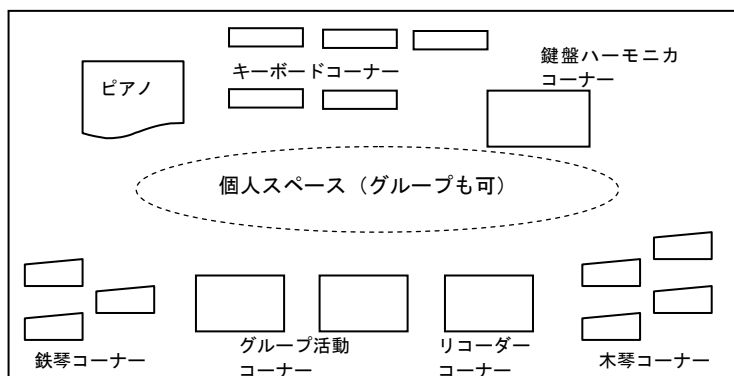
【資料6】練習の手引き「えんそうマスター虎の巻」



このように、児童の技能レベルに応じて㊦～㊤の5段階に分けてどのように練習すればよいのかを示し、それぞれの段階での補足やおすすめの練習スタイル、使える教具等も示すようにした。

(2) 児童が主体的に活動できる場の工夫

これまでの音楽の学習において、児童の活動の様子を見てみると、1人でじっくりと集中して練習する児童もいれば、友だちと教え合いながら活動することを好む児童、先生に教えてほしいけれども、まわりの目が気になる児童など、実に様々であった。



【図4】活動の場の工夫

そこで、どの児童も自分に合った練習のスタイルで活動できるよう【図4】ように、さまざまな練習コーナーを設けた。それぞれのコーナーには、いつでも「練習の手引き」を確認できるようにしておき、「鍵盤ハーモニカコーナー」や「リコーダーコーナー」には、その楽器に応じた教具を準備しておくようにした。

(3) 児童が主体的に活動できる教具の開発

ア 練習用CDの作成

児童の主体的な練習をサポートする教具として、「練習用CD」の作成を行った。これは、合奏の模範的な演奏だけでなく、【表3】のように様々なパターンの演奏を収録するようにした。このCDを聴きながら楽譜をたどっていったり、合わせて演奏したり、階名唱をしたりと、児童が自分で決めた練習方法に応じられるようにした。



▲ 練習用CD

「練習用CD」の作成については、メトロノームにピアノの音を重ねたり、自分の声を重ねたりして録音する方法でも作成できるが、今回はコンピュータの音楽ソフトウェアを使用した。

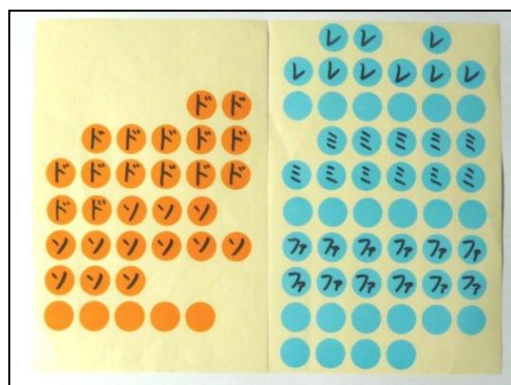
【表3】 練習用CDの内容と期待できる効果

CDの内容	具体的な内容とその効果
全体	合奏の模範演奏。これを聴くことによって、曲の全体的なイメージを持つことができる。
スローテンポ	ゆっくりなテンポでの範奏。ある程度練習が進んだ時に、ゆっくり合わせて練習できる。
パート強調	スローテンポの全体範奏をバックに、それぞれのパートの音が強調されて聞こえる。合奏において、それぞれのパートがどのように演奏されるのかがわかる。
パート階名唱	「パート強調」の内容に、さらに階名唱（ドレミ）が入っているもの。これを何度も聞いたり、一緒に階名唱で歌ったりすることによって階名を覚え、練習を進めて行ける。

イ リコーダーコーナーと鍵盤ハーモニカコーナーに設置する教具

リコーダーコーナーには、自分で運指を調べられるように、「リコーダーの運指一覧表」のカードや掲示物を用意した。

また、鍵盤ハーモニカコーナーには、鍵盤に貼る階名シールを準備しておき、必要に応じて貼ることができるようにした。ただし、ずっと階名シールを貼った



▲ 鍵盤に貼る階名シール

ままにしておくと、シールだけをみて演奏するようになり、なかなか技能が高まらないことが考えられるため、慣れてきたら徐々にシールをはがすように指導した。

(4) 学習マネジメントカードの作成

児童が自ら学習活動をマネジメントしていけるように、「学習マネジメントカード」【資料7】を作成した。児童が自分の練習の進捗状況をしっかりと把握するために、カードの上段には、楽譜の部分（フレーズのまとまり）ごとの練習の状況を記録するようにした。楽器演奏に苦手意識を持っている児童も、スモールステップで練習に取り組み、達成感を味わえるようにした。

自分の練習の状況をふまえ、カードの下段で次回の練習計画を立てさせるようにした。今回の活動をふり返り、次回は楽譜のどこを練習するのか、もっとよい練習方法がないか、もっと他に使えるような教具はないか、また、友だちと一緒に活動することや、先生に教えてもらうこと等、練習の手引き【資料6】も参照しながら、練習方法や手だてを自分で考えるようにした。

【資料7】 学習マネジメントカードの例（『TAKUMI』学習カード）

♪ TAKUMI 学習カード ♪						
6年 組 氏名 ()						
■ 練習のあゆみ ・練習したところに、日付をかきましょう。 ・できたらと思ったら、日付を○でかこみましょう。						
がくふの場所 パート	A	B	C	D	E	🎵
ハーモニーパート						
メロディ①パート						
メロディ②パート						
ピアノパート						
■ 反せいと、次回の計画						
★はんせい	月 日		月 日			
(○をつけましょう)	はい	まあまあ	あまり	いいえ	はい	まあまあ
今日の学習は楽しかったですか。	4	3	2	1	4	3
わけ						
自分から進んで練習できましたか。	4	3	2	1	4	3
わけ						
★つぎの練習計画 (れい)	めあて		めあて			
・メロディパートの図をマスターする。						
・ハーモニーパートを鉄琴でする。						
★練習の仕方 (れい)	練習の仕方		練習の仕方			
・スローバージョンCDの音を何回も聞く。						
・先生に図のところを教えてください。						

練習の進捗状況の記録

- 児童がスモールステップで練習に取り組み、達成感を味わえるようにした。
- 各パートごと、楽譜の部分ごとに練習した日を記録し、できたら○で囲むようにした。

活動の振り返り

- 「楽しくできたか。」「自分から進んで取り組んだか。」の2点で、今回の活動を振り返るようにした。

次回のめあてを立てる

- どのパートにチャレンジするか、楽譜のどの部分をやるか、など、具体的なめあてを立てるようにした。

練習の方法や練習のスタイルを考える

- 自分に合った練習の方法、だれと活動するか、使う教具などを考えるようにした。

（５）仮説２における授業での検証とその考察

ア 練習方法や練習スタイル、活動の場の工夫について

検証授業においては、児童がそれぞれの活動コーナーで主体的に生き生きと活動する様子が見られた。【写真４】では、リコーダーコーナーで練習用ＣＤを使って、友だちと協力しながら活動する様子がうかがえる。

また、どのように演奏すればよいのかを友だち同士で教え合う様子【写真５】や、なかなかうまく練習が進まない友だちに、教具を使って教える児童【写真６】の姿が多くみられた。教えてもらっている児童も、気兼ねなく友だちに尋ね、練習に集中していた。



【写真４】リコーダーコーナーで協力して活動する児童



【写真５】友だち同士で教え合っている児童



【写真６】鍵盤に階名シールを貼ることを勧めている児童

【写真７】では、キーボードコーナーにおいて、１人で時間いっぱい集中して練習に取り組む児童の姿や、リコーダーの運指表を見ながらじっくりと練習する児童【写真８】など、自分の立てた練習計画に従って、自分のペース、自分のやりたい練習方法で活動することができた。



【写真７】キーボードコーナーで集中して練習する児童



【写真８】運指表をみながらじっくり練習する児童

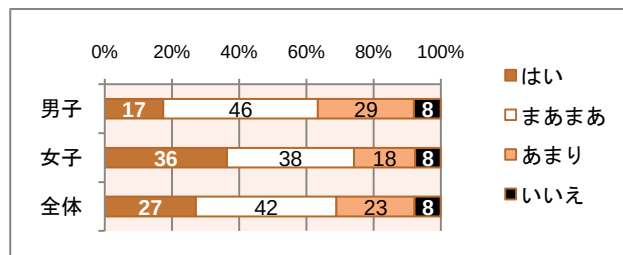
指導者は、基本的には児童の活動全体を見守り、少しでも練習が進んだり演奏ができるようになったら、大いに認め賞賛するようにした。また、活動が停滞している児童に個別指導をしたり、友だちと一緒に活動するよう促したりした。

イ 児童が学習活動をマネジメントする取組について

事前に行ったアンケート「音楽の学習で、自分から進んで活動しようとしていますか。」の問いに「はい」と答えた児童は全体の27%であった。事後アンケートにおいて「自分の練習計画をもとに、自分から進んで活動できましたか。」という問いに対して、1回目は85%の児童が、2回目は78%の児童が「はい」と答えていた。今回使用した学習マネジメントカードが、児童の主体的な活動を促す有効な手だてのひとつであったと考えられる。

事前アンケート

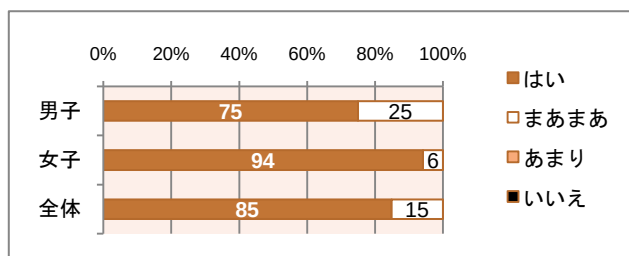
・音楽の学習で、自分から進んで活動しようとしていますか。



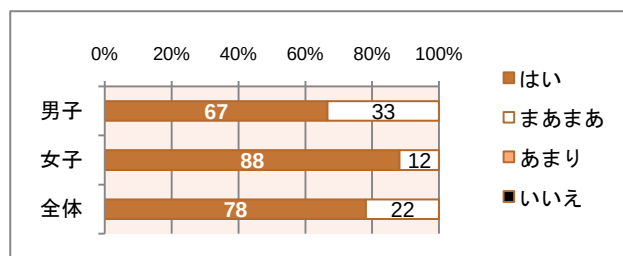
事後アンケート

・自分の練習計画をもとに、自分から進んで活動することができましたか。

▼（1回目）



▼（2回目）



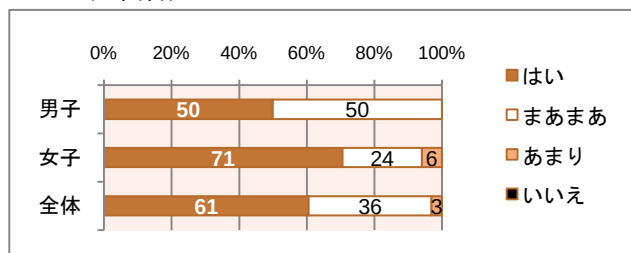
また、「自分で練習方法や練習パートを考えることができましたか。」という問いに、1回目、2回目ともに全体で97%の児童が、「はい」「まあまあ」と答えている。

児童が、自分自身の活動の進捗状況を把握し、次回の活動についてめあてを立て、練習方法や使う教具などを自分なりに考えながら練習を進めたことが、主体的な活動につながったのではないかと考えられる。また、2回目では「はい」の割合が大幅に増えていることから、練習方法や練習パート等を自分自身で考えることに慣れ、より効果的な練習スタイルや練習方法等を選択することができたのではないかと推測できる。

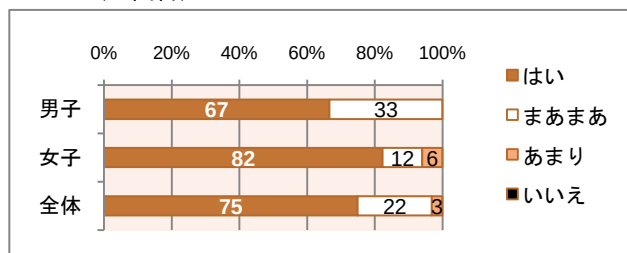
事後アンケート

・自分で練習方法や練習パートを考えることができましたか。

▼（1回目）



▼（2回目）



次の【資料8】は、実際の検証授業を行った際の、A児の「学習マネジメントカード」である。スモールステップで、「できる喜び」を感じながら主体的に活動し、自分自身で学習活動をマネジメントしている様子がわかる。

A児はまず「ハーモニーパート」に挑戦し、はじめの部分ができたところで、メロディパートに挑戦している。この曲のメロディを演奏したいという気持ちがうかがえる。メロディパートを練習し、できなかったところは次回の活動のめあてとして目標を立て、自分のやりたい練

習方法を考えることができた。また、「CDを使って、できなかったところを何回も聴いて練習したい。」と、具体的な活動方法まで決めることができています。2回目の活動では、前回の計画をもとにすぐに活動に入り、集中して練習する様子が見られ、メロディパートのほとんどを演奏することができるようになった。

この児童は、事前アンケートでは「合奏することがあまり好きではない」と答えていたが、今回の活動の反省で、前回できなかったところを克服した喜び、自分で練習方法を選択して主体的に活動できたという満足感が自己評価からうかがえる。また指導者側も、この学習マネジメントカードによって、児童の活動の過程がわかり、次の学習の計画や、どこでつまづいているか等を把握することができ、個に応じた具体的な支援に当たることができた。

【資料8】児童の「学習マネジメントカード」の例

♪ TAKUMI 学習カード ♪

6年 組 氏名 A児

■ 練習のあゆみ

- ・練習したところに、日付をかきましょう。
- ・できたと思ったら、日付を○でかこみましょう。

がくぶの場所	A	B	C	D	E	コーダ
パート						
ハーモニーパート	2/6	2/6				
メロディ①パート	1/6 (2/4)	1/6 (2/4)	1/6	1/6 (2/4)	1/6	1/6
メロディ②パート						
ピアノパート						

■ 反せいと、次回の計画

★はんせい	7月6日	7月9日
(○をつけましょう)	はい まあまあ あまり いいえ	はい まあまあ あまり いいえ
今日の学習は楽しかったですか。	4—③—2—1	④—3—2—1
わけ	曲が楽しかったから	A B がいってきたから
自分から進んで練習できましたか。	4—③—2—1	④—3—2—1
わけ	ハーモニーの A B ができたから	CDで「おまがくすき」けたから
★つぎの練習計画 (れい)	めあて メロディ①の A B をマスターする	めあて メロディ①のさいごをマスターする
・メロディ①のBをマスターする。 ・ハーモニーパートをピアノで弾く。		
★練習の仕方 (れい)	練習の仕方 C D の A B の部分を何回もきく	練習の仕方 さいごのところを先生の声が入っているCDで何回もきく
・スローバージョンの音を何回も聞く。 ・先生にBのところを教えてください。		

1回目 (7月6日)

<練習した所>

- ・ハーモニーパート A B に挑戦。
→ (できた。)
- ・メロディ①パート A ~ B に挑戦。
→ (C と B はできた。)

↓

<次の練習計画>

○めあて

- ・メロディ①パートの A B をマスターする。

○練習方法

- ・CDの A B の部分を何回もきく。

↓

2回目 (7月9日)

<練習した所>

- ・メロディ①パート A B 、さらに、B C に挑戦。
→ (A B C はできた。)

↓

<次の練習計画>

○めあて

- ・メロディ①の最後のところ (C) をマスターする。

○練習方法

- ・先生の声が入っているCDを何回もきく。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1 成果

- 児童になじみのある曲を教材化することで、児童の学ぶ意欲を喚起することができ、主体的に活動できる一因となった。この活動をきっかけとして、単元を通して意欲的に楽しく取り組む授業を展開することができた。
- 技能レベルに応じたさまざまなパートを用意したことで、どの児童も自分なりの目標を立て、自己実現に向けて取り組むことができ、挑戦する楽しさやできた時の達成感を味わいながら、表現の力を高めることができた。
- 児童になじみのある曲を教材化する際に、題材のねらいや「共通事項」の指導内容を位置づけたことで、その教材を通して児童に身に付けさせたいことが明確になり、ただ単に「楽しい」というだけでなく、音楽科の目標に迫る活動を展開することができた。
- 個人差に対応できる練習方法や教具を整備し、児童自身が学習活動をマネジメントできる手立てを工夫したことで、児童が自分の目標や活動内容を自己決定でき、自分のペースで、また、自分に合った練習方法で主体的に活動することができた。
- マネジメントカードを工夫・活用したことで、活動に対する意識の連続性が生まれ、スモールステップでの達成感を味わうことができるとともに、児童それぞれが目標を持って、意欲的・主体的に活動することができた。

2 課題

- 教材化した曲や学習マネジメントカードを活用して、児童が思いや意図を持って練習に取り組むことができたが、演奏（合奏）への思いや意図を十分表現できるような手立てについても、今後研究していく必要がある。
- さまざまな曲の教材化や練習用CDの作成等については、より簡単に効果の上げられる作成方法を研究する必要がある。また、楽器を演奏する技能をさらに高めるため、その教材の活用の仕方を工夫していく必要がある。
- 学習マネジメントについて、児童が自分自身で活動内容を自由に決定していくが、自分の技能レベルの認識が曖昧で、友だちに誘われて一緒に活動をしたり、技能レベルに合わない目標や活動内容を選択したりすることがあった。それらに対する手立てや支援の在り方について研究していく必要がある。

<引用文献>

¹⁾ 山本 弘（1981年）『誰にでもできる音楽の授業』明治図書（p22）

<参考文献>

文部科学省（平成20年3月）『小学校学習指導要領』

文部科学省（平成20年8月）『小学校学習指導要領解説（音楽編）』

教育芸術社（2008年11月）『〔共通事項〕の指導について 小学校版』

教育芸術社（2008年11月）『〔共通事項〕の指導について 中学校版』

小原光一編著（2008年12月）『小学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』教育芸術社

小原光一編著（2008年12月）『中学校・音楽科 新学習指導要領ガイドブック』教育芸術社

小原光一・山本文茂監修（平成9年4月）『音楽教育論』教育芸術社

日本学校音楽教育実践学会編（2003年3月）『音楽の授業における楽しさの仕組み』音楽之友社

安彦忠彦監修、坪能由紀子・伊野義博編著（2008年8月）『小学校 学習指導要領の解説と展開 音楽編』教育出版

春畑セロリ（2001年9月）『ピアノの先生のための楽しいスキルアップセミナー コードの達人』ヤマハ

<研究実践学校> 三股町立三股西小学校